

シンポジウム

北海道における水辺の課題と展望

(社)建設コンサルタンツ協会北海道支部では、河川や水辺の生活・文化・環境等にかかわる課題や活動などについて先進的に取り組んでいる皆様の提言・事例・体験などをご紹介します、北海道における水辺のあり方を考えるシンポジウムを開催しました。



開催日時：平成19年 2 月23日(金)13:30～16:30

開催会場：ホテル札幌ガーデンパレス

主 催：(社)建設コンサルタンツ協会北海道支部

後 援：北海道開発局、北海道、(財)北海道開発協会、
(財)石狩川振興財団、(財)河川環境管理財団、
(財)北海道河川防災研究センター

参加者 約140名

審査講評



佐伯 昇氏 さえきの のぼる
北海道大学名誉教授
NPO法人水環境北海道理
事長等

昨年 7 月に公募し、8 月 7 日に 4 名の審査員によって、3 大学、4 団体のプレゼンと、面接とで慎重に審議が行われました。

審査のポイントは、独自性、先進性、他のそういう団体に対してよい影響

を与え、参考になる等の将来性あるいは期待性があることを審査のポイントとしました。

今回、残念ながら、選定されませんでした、応募された他の研究や活動も大変すばらしいものがございまして、今後のさらなる活躍、活動を期待するものでございます。

研究助成報告

数値的解析を用いた空知川の砂州特性と河川環境に関する研究



岩田 圭佑氏 いわた けいすけ
榎谷 茂一氏 (共同研究者)
北海道大学大学院
水工・水文学研究室
▶昭和57年江別市生まれ。
趣味は写真撮影、マラソン等



空知川では、河道の変化性が顕著に見られ、自然の多様性をはぐくむ一方、防災上の問題点としては、河道の安定化や合理的な河道設計、が求められる。空知川では、交互砂州の影響により、局所的な洗掘が発生し、部分的な護岸整備を行っているのが、その後で砂州の移動がした場合に、また別の場所で洗掘が発生し悪循環が生じてしまうというのが、問題になっています。

そこで、局所的な計画ではなく、トータルとして、空知川を何とか、治水計画、環境を考慮するためにも、そういったものを把握するのが必要ではないかと考え、砂州の特性を把握することによって、問題の解決につながるのではないかと考え、「砂州の挙動を予測するための数値解析モデルの開発」を開発し、実河川と比較し一定の成果を得ました。



活動助成報告

ハサンベツ里山20年計画～里山とふるさとの川の再生と創出



高橋 慎氏 たかはし まこと
栗山町ハサンベツ里山計画
実行委員会 事務局長

▶実行委員会は、自然愛好団体、
社会教育団体、町内外の有志
が活動

私は栗山町オオムラサキの会の事務局長でもあり、雑木林主体の活動をしていました。水辺も含めた活動を進めたいと、植物や鳥の団体、青年会議所メンバーと、町に要請し環境省の支援を受け、ハサンベツ川の沢地を24ヘクタールの離農跡地を購入しここをどうする

かということ、かなり時間をかけて話し合いました。

最初は、ごみの処理から始め、行政と協力しながらやりました。2001年には、栗山町ハサンベツ里山計画を図案化し、田んぼだとか畑の復元、コウホネ池づくり、ホテルの復活、ミズバショウの群落やヤチブキの群落の再現、水車小屋、炭焼き小屋の建設、博物館建設計画などな事を絵であらわし、20年計画としました。

具体的には、童謡の歌の風景がなくなっているため、童謡の歌になじむなということで、例えば、「春の小川はさらさら」というと、ドジョウがいて、子供たちが遊べる2メートルぐらいの小川を約2キロにわたってつくる。里山センターを町の人に500円募金を呼びかけ建設したり、水車や炭焼き小屋も作などやりながら考えるというパターンです。



会員の資格は極めて単純で、働く人、知恵を絞ってくれる人、資材を持ってくる人、もちろん資金を持ってくる人、そのようなすべての個人、団体含めて実行委員会を構成し、町の者だけでなく町外の人にも手伝ってもらっています。

こういう活動をしているうちに、里山に人と生き物が帰ってきました。子供たちが帰ってきて、魚すくいをし、赤トンボは、北海道で一番

いるぐらい帰ってきました。ことし、扱った流域の子供たちは38団体、1,450人です。ほとんどの流域の小中学生が参加して、水と遊び学習しています。春になったら遊びに来てください。

講演1

北海道の水環境



若濱 五郎氏 わかはま ごろう
北海道大学名誉教授
NPO法人水環境北海道監
事・千歳川かわ塾塾長等

私は、もともとは雪とか氷、氷河、南極、北極とかの研究を昔やって、現在は、NPO法人北海道水環境の川塾の塾長を仰せつかっております。

本日は、そういう立場から、多少は川とか、あるいは水環境ということ

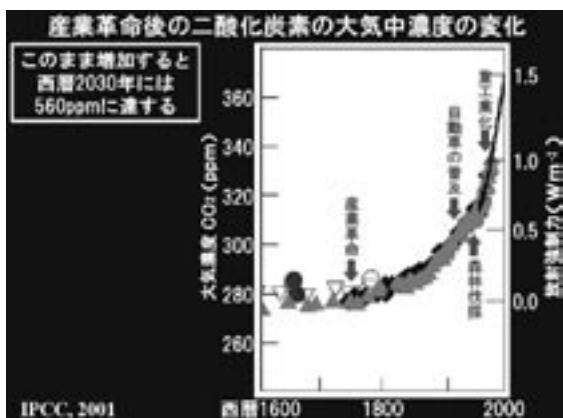
を、子供たちと一緒に勉強している立場でお話します。

河川整備は、欧米流のショートカットや洪水防止等から、近年、治水、利水や多自然川など環境や動植物、生態系、流域に住む人たちの人間の生活、あるいは歴史とか文化を総合的に考え始めました。

その一つの例として、恵庭市茂漁川では、先駆的に1980年代に、多自然川に近づけ、土木学会の2006年度デザイン賞の優秀賞にこの茂漁川改修が選ばれました。

今の学校は、川は危険、何か起こったら責任負わされるため、川に近づくなですけれども、川は、我々子供のころを思い出しても、いい遊び場ですし、本当の意味での学習の場です。

漁川では、魚が上れない、入ってこれないため、国が一遍つくったものを壊して、改修するという非常に困難なこともやった。また、もう一つの例では、カワセミの営巣するブロックをつくって、カワセミが帰ってきました。一方で、河畔林を作ろうということで、最近よく知られるようになった東三郎先生が考えられた、カミネッコンで雪中植林をしました。最近、異常気象で、大災害が多発し台風がたくさん来る、あるいは集中豪雨、大豪雪、暖冬、大洪水も起こります。当然、生態系が変化するし、我々人間にとってもいろいろ影響してきます。将来、温暖化の予測に役立てようと南極とかグリーンランドの研究をしようということになったわけ



です。

西洋文化の一番基盤にあるキリスト教は、俗な言い方をしますと、神様が人間のために全地と、そこに住むすべての動物、植物を支配する権威を与え、日本では、人間は自然と一体、対等で、一員でありお互いに大事にし合って生きようというのが、(アイヌの方もそうですけれども) 古来の考え方です。

人間というのは不完全なことしかできません。完全なものはできません。いいことがあれば必ず悪いこともあります。文明は非常にありがたいが、必ず公害とか環境悪化などがあり、20世紀後半からマイナスの部分が非常に目立っており、無視できなくなってきたということを認識すべきです。

講演2

川の心と福祉の心



石川 治江氏 いしかわ はるえ
NPO法人ケア・センターや
わらぎ代表理事、社会福祉
法人にんじんの会理事長、
立教大学非常勤講師等

私が立川駅でエレベーター設置を要求する会の運動をしているときに、障害を持った人たちと、バーベキューを企画しました。当時、車いすで、全く川原におりられませんでした。

全国の福祉施設だとか医療施設も、全部川を背にして建っています。お年寄りが2階とか3階から、窓から川を眺めていて、子供たちがいないのに、あそこで子供が遊んでいるとか、何か1人でブツブツブツブツ言っています。施設の職員の方に「この施設からあの川原の土手とか川原におりられるのですか」と言うと、ほとんどおりられません。

そこで、障害を持った人と一緒にお花見をしたり、バーベキューをしたり、楽しめる場所を求めていろいろなところを探したのです。

当時、男性ボランティアはほとんどおらず、障害を持った人をおぶって、石ころだらけの川原へ土手からおりて、砂地のところまでいけるところをすごく探したけれども、結局ありません。

子供でも、私がよくおぶった障害者は68キロあり、大変な騒ぎなのです。

しかし、障害を持った人たちが生まれて初めて川原におりた、生まれて初めてバーベキューをしたと大変喜びました。

この10年間、川と福祉と言い始めた当時、福祉の領域の人は、川と福祉なんていう発想が出ないのです。川と福祉で全国交流会に行っても、川の人たちは沢山出てくるのに、福祉の人たちの出席は少ない。

高齢になったり障害を持つと、例えば土手を歩くとか、川辺で川風を受けたり、一緒に子供たちと川で遊んだりとかというのは、ずっと昔のことになってしまっています。

川と人との関係をどうつくっていくか、福祉という領域も、川という領域もハード・ソフトいろいろな領域が融合して解決に向うべきです。

今、私たちの組織とあるデベロッパーと組んで、ハードとソフトを融合して介護つきマンションより高機能で、いろいろな機能をつけたものをつくろうではないかということを言っています。

「登山口は違って頂上は一つ」。

河川法は、公共の福祉が視野に入れた法律だということは、大変素晴らしいことです。

